

中学生になって認識した「戦後」

中学に入学早々、同級生の多さに先ずびっくりした。

一昨年まで居た多古の校舎に戻った僕らは、一学年だけで何と五百人余、十一クラスが東側にある一棟の一、二階に溢れんばかりとなった。生徒の住むエリアがこれまでの学区の数倍に広がったのである。

当然のごとく、これまでの小学校時代とは比べようもない様々な学校生活が展開されることになる。

そこで、ようやく僕は「戦後」であったことを気付かされた。

戦後社会の縮図そのもの

そこは、戦禍の癒えない傷を抱えたままの生徒が混在する、当時の日本社会の縮図であったように思う。

そして明らかに、僕らの意識には小学校時代には見えず気付かなかった社会認識が芽生えていたのだ。

肌色の違う、いわゆる混血と呼ばれた生徒も存在する。一方で裕福な家庭の生まれのうわさも出るようになった。

やがて、中にひととき目立つ粗暴な態度や行為が散見されるようにもなった。

荒んだことはあったが・・・

女の先生の音楽時間であった。

始業時間になっても、委員の僕以外の男子生徒が誰一人教室に居ないことが起きた。授業をすっぽかしたのだ。

困った僕は、隠れ先を隣接する防空壕跡と見当つけて踏み込むと、案の定、薄暗い中に二、三十人の男子生徒が腰を落としてじっとしている。入口に仁王立ちの三人。

三人とは、ガタイが大きく四角張った顔立ち、吊り上った目つきで肩で風切る番長風のS、混血児なのか肉厚の唇で浅黒い風貌のK、このふたりはどこでどう心を入れ替えたのか、社会へ出てからは会社を興したり真面目な活躍を耳にしているが、もうひとりとは表情からして如何にもグレた性格、中学卒業後にはチンピラとなって小田原駅の前で凄みを利かせてぶらぶらするようになったY。同じクラスに三人の悪童が揃った。

そそのかしたのは彼らである。

訊いてみると、他愛のない嫌がらせで云わば憂さ晴らしのようなものであった。

ただし、この連中は先生に向けられる反抗が主なもので、生徒仲間には威張って時に乱暴者であったが、特定の生徒をイジめるような陰湿な行いは無かったように思う。

同じ一年次、他のクラスで危ない事件が起きていた。

教室内でひとりの生徒が刃物を振り回したというのだ。幸い怪我人は出なかつたとされているが、詳細は伝わって来なかつた。ただ、多くの生徒に鳥肌が立つような怖さが事件を起こした生徒名「X」とともに瞬時に伝わった。

やはり、そこで戦中戦後に負った傷を心に抱えていたのかも知れない。

二年になって、ある日のことだった。

「やながわ君」と呼び掛けながら、他クラスの生徒がひとり近づいて来た。顔を見てはっとした。一年生るとき刃物事件を起こしたX君だ。すでに顔は見知っていたが、避けてきたところだ。

やや身構えるような面持ちでいると、何と！柔らかな顔つきで「やながわ君、思春期って知ってる？」などと、思わぬことを

聞いてきた。戸惑っていると、何か別件の話題があったのか、親しく話し込んでくる。その大人びた落ち着いた雰囲気、あつげに取られながら半ば上の空で聞いていた自分は、なぜ彼があのような刃物を振り回す事件を起こしたのか、そのあまりのギャップにただ戸惑っていた。

さすがに、何故？とは訊けなかったが、ひよっとして、「思春期って：」の問い掛けの中に、彼の心情を吐露したものが潜んでいたのかも知れないと思ったりしていた。まさに、みんな多感な一時期を過ごしていたのだろう。

後年、僕ら夫婦が駅に向って歩く栢山の県道で、ブブツとクラクションを鳴らす走行中の男がいた。渋い男前のX君の柔らかな笑顔があった。

Aという名の、ごく普通の女生徒が居た。

僕は三年次に同じクラスとなったが、後年一緒になった妻の話聞くまで全く知らなかったが、九州は熊本であったか彼女は戦争で身寄りが全く居なくなった身で、知り合いにお世話になったりしながら転々とし、やがて小田原のお寺の住職を兼ねていた中学の先生宅に招かれて身を寄せるようになったそうだ。

その話を聞いて、今では聞かなくなった「遠くの親戚より、近くの他人」の有り難味。そして、それまで何ら変哲も感じたことのない担任であったその先生をすっかり尊敬するようになった。

さらに後年、妻の職場である図書館に訪ねてきたこともあつたそうで、やがて結婚し子供を授かった話を聞いて、僕はとても嬉しく感じたことを覚えている。

